

研究者集団と地域・企業をつなぎ 社会課題の解決や新たな価値の創出を。



インターネットが一般に普及してわずか30年。その進化は止まることを知らず、社会のあり方や私たちの暮らしを大きく変えてきました。

こうした時代の流れをいち早く捉え、情報と社会の関わりを探究してきたのが、社会情報学の第一人者・安田孝美先生です。

今年4月には本学の「研究推進・地域連携センター長」に就任。特命副学長として大学全体を見渡す立場も担っています。そんな安田先生に、研究者としての歩み、センター長としての決意と意思を聞きました。

情報技術を人と社会のよりよい未来に。

社会情報学は「情報通信技術が社会や暮らしにどんな影響を与え、どんな可能性を拓くのか」を追求する学問です。いまやネットは買い物や調べ物はもちろん、生成AIを使えば外国語の翻訳や文章作成、さらにはコンピュータプログラムまで作ってくれる時代になりました。一方でソーシャルメディアの悪用や情報漏洩、ネット詐欺など、新しい道具には影がつきもので、そういった負の部分も人類の知恵としてしっかり対応していかななくてはなりません。

私がこの分野の研究に関わるようになったのは1993年のこと。日本でインターネットの商用利用が始まった年です。当時名古屋大学に新しく「情報文化学部」が設立されることになり、工学部から異動しました。米国でネットの一般利用が広がるのを見て、日本でも社会を揺るがす大きな変革が必ず起こると感じたのです。情報技術を人間社会にどう生かすか。その問いが私の研究の原動力でした。

社会情報学の研究はワクワクすることの連続。

情報技術の進展は社会のあり方を大きく変えつつあります。新たな発見や問いに出会うたびに刺激を受け、ワクワクしながら研究を続けてきました。手がけたテーマはいくつもありますが、印象深いのはコンピュータ・グラフィックスを用いた天体現象のシミュレーションです。1994年シューメーカー・レヴィ第9彗星が木星に衝突する現象が起き、名古屋市科学館と宇宙科学研究所と共同で彗星の軌道を計算し、衝突前から衝突までの軌道を約8分のCG映像として可視化しました。NHKはじめ多くのメディアにも取り上げられ、映像は天文学研究者にも配布されました。社会と情報技術の関わりをテーマにした研究では高山市での産官学民連携による観光DXが印象に残っています。市職員や企業と連携し、駐車場の車のナンバーを識別して来訪者がどこから来たのかや滞在時間を分析、高山市と商店街の観光施策に活用していただきました。この取組は2022年の内閣官房主催「Digi田甲子園」で



今年8月25日に開催されたシンポジウム「工学分野における女性活躍への期待」で、女性活躍への期待や課題についてパネル討論する登壇者たち。



本学の卒業生で、名古屋大学大学院情報学研究所の浦田真由准教授が、情報学に関心を持ったきっかけなどを基調講演。



パネル討論には本学学生と金城学院高校の生徒も参加。

ベスト8に入賞し、審査員評価では1位を獲得。現在も名古屋大学の研究チームが継続して進めています。実はこのプロジェクトを今も担う浦田真由准教授は金城学院の中高大出身で、大学院から私の研究室に加わり、以来ともに研究を続けています。

研究推進・地域連携センターは 大学と地域をつなぐ架け橋。

研究推進・地域連携センター長としては「先生方の研究をさらに前に進め、地域との連携をさらに広め、深めていきたい」という思いが強いです。本学にはすでに多くの共同研究や教育連携があります。それらを学内で共有し、部局の垣根を越えた新たな共同研究や共同地域連携につなげていく。そして外に向けても積極的に発信していくことで、日本が直面する高齢化や人口減少といった課題解決に少しでも寄与できる仕組みをつくっていきたく考えています。

若い世代の学びと挑戦を後押しする 環境づくりも。

現代社会においては従来型の思考では課題解決が難しくなっている分野が数多く存在しています。「イノベーション」が求められている時代だからこそ柔軟な発想力が必要で、そのためのアントレプレナーシップ教育は本学にとって欠かせないと感じます。私自身、中部地域でのスタートアップエコシステムの構築を目指し、中部経済連合会と名古屋市が2019年に設立した「ナゴヤイノベーションズ ガレージ」の運営に関わっていますが、本学の学生諸君にも、この起業家精神を育んでもらいたいと願っています。この起業家精神というのは必ずしも起業することのみが目的ではなく、組織の中にあっても、革新的なアイデアを創出するための志を持つことを意味します。いつも課題意識を持ち、そのための解決法を見出していき、または課題そのものを発見できる力身につけてもらいたいと思います。

さらにセンターでは、中・高・大が連携して取り組む活動にも力を入れていきます。人としての成長に極めて重要なこの時期に、社会と接点を持つことはとても大切です。今年8月には本学と日本工学アカデミー中部支部との共催で「工学分野における女性活躍への期待」をテーマにしたシンポジウムを本学で開催。民間・自治体・大学で活躍する女性リーダーに加え、高校生にも参加していただき、世代を超えた議論が展開されました。今後もこうした「中高大連携」の場を積極的につくりたいと思います。

女子総合大学の強みを発揮して 社会課題の解決と新たな価値創出を推進。

社会には女性特有の課題が数多くあります。人口の約半数を占める女性の課題を解決することは、人類全体にとっての継続的なテーマです。フェムテックという言葉をご存知でしょうか？ Female (女性) と Technology (技術) からできた造語で、女性特有の健康課題について、先進的な技術を用いて対応する製品やサービスを指します。女性特有の健康課題による労働損失などの経済損失は、社会全体で年間約3.4兆円とも言われています。文系、理系の枠を超え、女性の生き方や社会参加を多面的に学べる本学は、こうした社会課題に応える大きなポテンシャルを持っています。

本学は文学、生活環境学、人間科学、看護学、薬学に加えて、2026年にはデザイン工学部と経営学部が新たに誕生し、7学部体制となります。まさに女子総合大学として広くウイングを広げた学問分野をカバーすることになります。広範囲の学問分野をもつ研究者集団がより高度な研究を推進し、民間企業や地域など学外組織とより深く連携してこそ、新しい価値が生まれます。私自身も、これまで紡いできた経済界・民間企業や自治体、国の機関などとのネットワークを活かし、研究者集団と地域・企業をつなぐ役割を全力で果たしていきたいと考えています。

私はまだ4月に着任したばかりの新人で、学内外の皆さまに助けをいただくことがたくさんあります。課題や要望、アイデアなど、ぜひ率直にお聞かせください。皆さまとともに歩みながら、金城学院大学の新たな可能性を育てていきたいと思っています。

研究推進・地域連携センターの事業・活動の詳細はこちらをご参照ください。

→ <https://www.kinjo-u.ac.jp/ja/research/>

安田孝美 YASUDA Takami



名古屋大学大学院 工学研究科情報工学専攻 博士後期課程単位取得満期退学、工学博士を取得。名古屋大学で助手、助教授、教授を務め、2017年の情報学部設立に部局責任者として関わり、情報通信を活用した新しい社会・教育・文化・経済のあり方について、文理の枠を超えて多方面から研究を推進。2025年4月金城学院大学特命副学長・教授・研究推進・地域連携センター長に就任。